

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

計画の見直し／学校法人中沢学園 みなみ若葉こども園

栽培や飼育計画は、どのようなきっかけで見直していますか？また、どのような視点をもって見直していますか？

稲作りに関わる子どもたちの姿を捉え、「保育者が思いもなかった子どもの姿」という視点を持ち、計画の見直しを図っている園の実践をご紹介します。

実践からは、「科学する心」を育むために、子どもたちの姿に寄り添った柔軟な保育者の援助や環境作りの工夫やその重要性が見えてきます。



● 稲作り／5歳児

✦ 事例1「白い粒々は何？」（5月中旬）

- Aちゃんが、自分が育てている苗の茎の所に白い粒々があるのを見付ける。「この白い粒々。なんだろう？」
- すると、次々に自分の苗はどうかを見て「僕のものもある」「私のものもある」と大騒ぎをする。
- 稲作指導をしてくださっている地域のDさんに子どもたちが質問すると、「虫の卵ではないか？」「苗が弱っている」と教えてくれる。そして、子どもたちは、『苗が弱っていること、このままだと苗が枯れてしまうこと』が分かる。
- Bちゃんは苗を心配し、その白い粒々を「気持ち悪い」と言いながらも、手で取り除こうとする。
- Cちゃんは「虫はどこから来たんだろう？」「どんな虫なんだろう」と想像し、友達と話す。



● 読み取り

- 苗をよく見る目が育ち、愛情込めて世話をしてきたからこそその育ちと思われる。
- 苗を大事に守り育てようとする気持ちや苗への愛着が感じられる。

✦ 事例2「アメンボを見付ける！」（6月中旬）

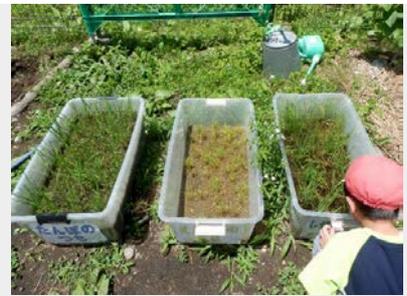
- いつものように苗の生長を見るため“ミニ田んぼ”に行くとアメンボがいるのを見する。
- 田んぼにアメンボがいるのは見て知っていたが、田んぼから離れた自然園の“ミニ田んぼ”にアメンボがいることを不思議に思う。

子ども：「どこから来たんだろう？」

子ども：「田んぼから歩いて来たのかな？」「・・・?!」

Bちゃん：「飛んできたんだよ！アメンボって飛ぶって言うてたよ」と、得意げに話す。

- 他の子どもたちは「えー！ そうなの?!」と半信半疑の様子でいる。
- 次の日、“ミニ田んぼ”を覗き込むが、アメンボの姿はない。
子ども：「どこ行ったのかなー？」
- 子どもたちの興味を受け止め、保育者は、アメンボについて掲載している本を読む。子どもたちは、「本当だー！アメンボって飛ぶんだー」と新たな発見を喜ぶ。
- その後、星、動物など様々な種類の図鑑を家から持ってくる。



● 読み取り

- アメンボが水面を上手く滑ることは知っていたが、空を飛んで移動することを友達の情報から知り、ますます興味が増す。“知らないことが分かる”という楽しさから、絵本や図鑑を好んで手にし、友達と一緒に見ることに繋がった。
- 図鑑への興味が広がり、様々な種類の図鑑を保育者に読んでもらおうと家から持ってくる姿には、“みんなにも教えたい”“同じ気持ちを共有し話をしたい”という気持ちが表れていた。

✦ 事例3「生き物との出会い」（6月下旬）

- 頻繁に田んぼに足を運び、生き物たちとの新たな出会いが始まる。
「しっぽが生えてるカエルがいる！」
「えーどこどこ？」
「ほんとだ！しっぽがある！」
「オタマジャクシだったからだよ」
「そうだ！そうだ！」
「しっぽがあるカエル捕まえたい！」
「カエルになったばかりは弱いんだよ。ずっと水の中だったからね」
「黒いカエルもいるよ！」
「えっ！？黒いカエル？」
「後ろ足が生えてる！」
「オタマジャクシがカエルになってきたんだよ」



● 読み取り

- 子どもたちは、オタマジャクシからカエルになる過程を繰り返し図鑑で見ている“自分たちはよく知っている！”と思っていただろう。しかし、実際の田んぼでどの成長過程に合えるのかは分からない。体の色の違い、水の動き、足の動き、葉っぱへジャンプする一瞬の動作に心を奪われ、身体全体が『目』になっているように感じた。
- 5歳児は、今までの経験やもっている知識に基づいて考えることができるようになった。
- 断片的に表われる自然体験に心奪われ、自分たちが知っていることと重ね合わせている。同時に新たな好奇心が生まれ「もっと近くに」「もっとそばに」「触れてみたい」「共に過ごしたい」と親しみが湧き、その後の姿に繋がって一気に田んぼの生き物への関心が高まっていった。

✦ 事例4「稲の花を発見！」（8月上旬）

- 夏休みは、多くの子どもたちが休みになるため、休み中に稲の花を観察できるように、保護者に子どもたちの今までの取り組みを知らせると共に、稲の花が咲く時期や時間を知らせる。また、夏休みに描けるように絵を描く用紙を渡す。
- 8月3日には、お米がどこにできるのか？という疑問が子どもたちに湧き、稲の穂探しをする。
- 1週間後、「おじいちゃんの田んぼは稲の花が咲いたよ」と子どもたちの間で“稲の花”についての話が頻繁にでる。「そろそろ稲の花が咲いているかな？」と期待し、田んぼへ見に行く。
Aちゃん：「うわぁ！稲の花だ！白くて小さいんだね。匂いはしないなぁー」

● 読み取り

- 虫眼鏡を準備したことにより、「よく観よう」という気持ちをますます強くした子どもたちは、稲の花をじっと静かに見る。いろいろな思いを馳せて見ているのであろう。



+ 振り返って

- 稲作りを通して、子どもたちには「発見する目」「見つめる目」「楽しみにする目」「期待する目」などの様々な『自然を見つめる目』が伸びていることが分かった。小さい学年から自然体験を積み重ね、繰り返してきたからこそその姿であると考えられる。田んぼは子どもたちにとって魅力ある場へと変わった。子どもたちの自然に対する面白さを捉えたり、認知する力やその時の感情を表現する姿が伸びた。
- 保育者は子どもの問いをみんなの問いとして言葉を投げかけ、話し合いの場をもち、時にはみんなを巻き込んで遊び、その遊びを子どもたちと一緒に振り返り、次へと繋げることの大事さを確認した。子どもを見つめ、保育を振り返り、時には保育計画を子どもの状況に即して変えていくことは、子どもが主体的に遊びを展開し発展していくことに繋がる。さらに、子どもたちに「科学する心」が育まれる保育に結び付くのだと思われる。

<p>稲作り実践記録</p> <p>8月3日 稲の穂探し</p> <p>お米がどこにできるのか？という疑問が子どもたちに湧き、稲の穂探しをする。</p> <p>1週間後、「おじいちゃんの田んぼは稲の花が咲いたよ」と子どもたちの間で“稲の花”についての話が頻繁にでる。「そろそろ稲の花が咲いているかな？」と期待し、田んぼへ見に行く。</p> <p>Aちゃん：「うわぁ！稲の花だ！白くて小さいんだね。匂いはしないなぁー」</p>	<p>稲作り実践記録</p> <p>8月10日 稲の花探し</p> <p>「おじいちゃんの田んぼは稲の花が咲いたよ」と子どもたちの間で“稲の花”についての話が頻繁にでる。「そろそろ稲の花が咲いているかな？」と期待し、田んぼへ見に行く。</p> <p>Aちゃん：「うわぁ！稲の花だ！白くて小さいんだね。匂いはしないなぁー」</p>
--	--

稲作り 実践記録
(画像クリックでPDFが開きます)

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」